



e-La Voz

「エー・ラ・ボス」と読みます

HCJB『アンデスの声』 日本語放送 メールマガジン (第16号)

2004年3月1日発行

刑務所内でストライキ

～人質となったRuss Meehanの手記より～

南米エクアドルの首都キトにある連邦刑務所は、百年以上前に建てられた。正面は見るからにヨーロッパの館をおもわせる風格だが、裏庭はない。脱獄できないように、西にそびえるピチンチャ山の断崖絶壁を背にしているからだ。そのせいか、この白亜の殿堂は地下にくぐりぬけの穴が迷路のように掘られており、別の名を「蜂の巣城」とつけられている。

2月15日、日曜日のことだった。いつものように、私は麻薬でつかまって服役中のアメリカ人スコットに面会するため刑務所を訪問した。その日、私の身に予期しないことが起こったのである。刑務所の待遇に不満をつのらせていた囚人たちが、面会者を人質にとってストライキを敢行し、巻き添えにあった私は所内に足止めされてしまった。すぐに電話をかけなければとあたりを見まわしたが、カード式電話が一台あるだけ。しかも長い列だ。カードを持っていないので、まわりの人にたのみこんで何とかアメリカ大使館と家には連絡をとることができた。刑務所の内部は中央ホールが吹き抜けの円形ドームになっていて、そこから三方向にむかって放射状に棟舎が伸びている。私がいるE棟は男子監房で定員66名だが、現実には108名が収容されているため半数は宿無し、マットレスだけをかかえて建物の片隅を安住の地にしている。それについで自分の部屋やベッドを賃貸して稼ぐものもいて、相場は部屋が300ドル、ベッドだけなら150ドルになっている。囚人服が支給されないため各人の服装はそれぞれで、何となく難民キャンプにでもいるようだった。面会者との区別は入り口で身分証明書と引き換えに押しもらうゴム印のスタンプが決め手となるので確かめておく必要がある。最初の夜は責任者らしい男が私には毛布を貸してくれた。2階の事務所で寝てもいいといわれたが、そこはすでに他の家族が占領していたので、仕方なくホールにいるスコットのマットレスにもぐりこんで不安な一夜を明かした。

所内での食事は、一日三回、パン、ライス、肉、野菜、スープなどが大鍋に入れられて、中央ホールの3階から階下までロープで吊りおろされる。それを係りがみんなに配分するシステムだ。月曜日の昼前、ひととおり食事が吊り下げられたあと、ひとりの男が太いロープに体をまきつけて降りてきた。ストライキで通路が閉鎖されたのでE棟に帰れなくなり屋上伝いにもどってきたという。とっさに私の頭に屋上にさえ出れば、そこから外に脱走できるかもしれないという考えがひらめいた。はやる気をおさえながら夕食のときを待った。大鍋が全部おろされひと息ついたところで、私はロープを自分の体にまきつけた。ロッククライミングの要領で1階、2階、3階へと身をおどらせた。登山できた体にはたやすい作業だった。ところが3階の手すりにつかまった途端、上でみていた警備員が飛んできて私のシャツをつかんだ。「もどれ、下へおろろ。」突き落とされそうになった私はさげんだ。「私は面会者だ。ストライキとは無関係だ。帰らせてくれ。手にスタンプもある。」こう言って手の甲におされた面会者であることの証明になる青いスタンプの文字をみせた。それでも警備員は首をふって何を言ってもきここうとはしない。押し問答のあげく私はあきらめた、というより、「お前にはまだ用がある。ここに残れ。」という声がきこえたように感じた。そこでおとなしくひきさがり、ロープを手をふたたび階下にもどっていった。まわりで見ていた群集からは「コマンド！（特殊部隊）」という声があがった。意外なところで日頃の訓練が役に立つものだ。

火曜日の朝、食事の時間にコロンビア人のアレックスが不審な態度をみせはじめた。どうやら私たちのテーブルにおかれた三個のパンが気になるらしい。ぶつぶついいながら近づいてくると「おれはもともと盗みなどしたくないのだが、余分にくすねる奴をみるとむかつくんだ。」と言うやいなやパンを三個ともわじぶみにしてさっさと姿を消してしまった。窃盗、恐喝、麻薬、殺人などをくりかえしてきたアレックスの現行犯をみせられて私は神に祈った。「神よ、悪い仲間を誘いこまれ、みずからを見失っているアレックスを救い出したまえ。必要とあらば愛のむちを…」その日の午後おそく所内は緊張した空気につつまれた。だれかが独房から小型テレビを盗み出したのでその犯人さがしがはじまったのだ。みつかるまで犯人は仲間からひどいリンチを受けるのが慣わしになっていた。その夜、私のところに使いがきて、アレックスが私に会いたいという。指定された中央ホールに出かけると、薄暗い一隅にアレックスが毛布に包まって横になっている。声をかけるとふりむいたアレックスの顔を見て私はぎょっとした。右目がゴルフボール大のみみずばれになっており、腕も手も指もナイフで刺されて切り傷だらけ。私をみてアレックスは涙をぬぐいながら来てくれた礼をいった。細くかすれた声に覇気はなかった。「祈ってほしいんだ。この俺はイエス・キリストに助けをもうけられない。テレビを盗んだのは俺なんだ。今夜あとでまたリンチをうけて俺は殺されるかもしれない。その前に

自分の罪を始末しておきたいんだ。」アレックスは真剣だった。自分の罪を告白し神にゆるされたいと切実に訴えた。私はまずアレックスにその気持をそのまま神に告げるようにうながした。そのあとで私はアレックスのゆるしと再生のために心をそそいで祈った。祈り終えて目をあげると、そこにふたりの男が立っていて「仲間と相談してこの件はもうきりをつけたので心配しないように。」と告げるとアレックスの肩を軽くたたいて立ち去った。夜中の一時半をすぎたというのに、アレックスのまわりにはいつの間にか聖書クラスのひとたちが見舞いに集まってきていた。アレックスが自分は今夜救主イエスをうけいれて神の家族に加わったと証しすると、みんなは罪人のかしらが悔い改めて生まれ変わったといいながら、かわるがわるアレックスと抱き合っよるこんでいた。

人質となって四日目の朝が明けた。さすがにアレックスは昨夜の疲れが出たのかぐっすり寝こんでいる。十一時からの聖書クラスでは、私がメッセージをたのまれたので聖書をひらいて旧約聖書イザヤ書から話をすすめた。＜恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから…。彼はいたんだ筆を折るもともなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。＞(イザヤ書41章,42章)ここに記してあるように、私たちの神は「いたんだ筆」や「くすぶる燈心」のような弱く、しいたげられたものを助けられる方である。いたんでいるがゆえにいつそう手厚い保護が必要であり、もみ消されそうな燈心だからこそ油をそそいで明るく輝かせてやらなければならない。しかし外的力を加えただけでは立ちあがることはできない。内的力であるまことの愛だけが私たちを変えていくのである。私はこう話をむすんで所内にいるみんなのためにとりなしの祈りをささげて席についた。

集会が終わると、待っていたかのように聖書クラスの責任者が前にすすみ出た。「みなさん、グッド・ニュースです。ストライキが解決しました。政府は受刑者全員に一年の減刑を約束したようです。」この朗報をきいて一同は歓声をあげた。スコットに近づいて私は耳打ちした。「これで君はあと何年だ?」、「あと一年半」、「もうすこしだね。頑張ろう。祈っているよ。」、「うん、ありがとう。」大きくうなずきながらひさしぶりの笑顔をみせるスコットに別れを告げて、私はやっと刑務所をあとにすることができた。四日前に私の手に押されたスタンプはほとんど消えかかっていた。一方、私の心には一生忘れることのできない刑務所生活の記念スタンプがしっかりと押されたのである。

Russ Meehan – 現在HCJB放送局と隣り合わせにあるアライアンス・アカデミー校(幼稚園～高校)で教鞭をとっているアメリカ人宣教師。二児の父親。アンデス登山のベテラン。両親もコロンビアとエクアドルで宣教師として長年奉仕。

HCJB日本語放送担当

在 住 尾 崎 一 夫 久 子

【ホームページのご案内】

HCJB日本語放送のホームページ(<http://www.hcjb.org/japanese/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「[フォーラム](http://www.hcjb.org/japanese/forums/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「[メールマガジン e-La Voz らいぶらり](http://www.hcjb.org/japanese/mmoz/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/mmoz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。

このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録は、下の該当ボタンを選択し、必要事項をご記入の上、[この内容で送信する] ボタンをクリックして、手続きをお願いします。なお、**Netscape 6.2以降をお使いの場合、このメールマガジンに埋め込まれているご登録手続きの機能はご利用いただけません。**ご面倒ですが、[HCJB日本語放送](#)まで別途メールにてお知らせください。

配信の停止 (※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

配信変更先のメールアドレス

(※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

○ 新規登録するメールアドレス

この内容で送信する

リセットする

※お送りいただいた内容はメールリスト・サーバにより自動的に処理しますので、余分な内容は一切入れないでください。
※このメールマガジンはコンテンツが大きいため、携帯電話への配信はできません。



Copyright © 2004 by HCJB. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://www.hcjb.org/japanese/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.